



Kobe Shoin Women's University Repository

Title	マクベス婦人論 一狂乱をめぐる一
Author(s)	社本 時子
Citation	研究紀要, 第二号 : 23-32
Issue Date	1961
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

マクベス夫人論

— 乱狂をめぐって —

社 本 時 子

I

..... Go get some water,
and wash this filthy witness from your hand.
.....

A little water clears us of this deed: (Act II, Sc. ii)

(さ、あちらへ行行って、水を汲んでその汚い証拠を手から洗い流しておしまいなさい。)

(少しの水で、した事は綺麗になります。)

ダンカンの血潮に染ったマクベスの手を見て、能面の表情で、冷然と言い放つ、マクベス夫人のこれら一連の言葉に奥深い心の戦きを一筋でも感じ取る事が出来るだろうか。あまりに合理的と言えは合理的な、非情のマクベス夫人が、何故に精神の異常を来たしたのであろうか。彼女独特の魂の問題を無視した、手に附いた血は洗えば取れるという安易な考え方を押し通してゆけば、恐怖のあまり夢遊病にかゝり、自殺にたち至る筈はないのではなからうか。魂の問題を考慮しない人間には気も狂う程の恐怖等ない筈だから。

Will all great Neptune's ocean wash this blood

Clean from my hand? No, this my hand will rather

The multitudinous seas incarnadine,

Making the green one red. (Act II, Sc.ii)

(大洋神の海の水を悉く使ったら、この血を洗って手が綺麗になるだろうか？ いや、俺のこの手がむしろあの限りない大海を真紅に染め、緑の海を真赤にしてしまうであらう。)

と犯した罪の深刻さに脅えるマクベスが、精神錯乱に陥るというのであれば話の筋は通るが、何故に精神的悩みを持たない筈の彼女が気狂になったのであろうか。それでは話は逆ではないか。

— What, will these hand ne'er be clean?

(あゝ、何時まで経ってもこの手は綺麗にはならないのかしら。)

まさに生命の最後の燃焼も尽きんとする時に独り淋しく呟やく夫人に、あの昔日の豪胆な面影の一鱗さえ認める事は出来ない。心境の変化というには、あまりにかけ離れた、繋ぐ事の出来

ない二つの人間像ではなからうか。どちらの彼女がより真実の彼女なのであろうか。一見この矛盾せるところにマクベス夫人の性格上の謎が、同時に作家としてのシェイクスピアの秘密がある様に思われる。以下この謎を明らかにしてゆきたい。

Ⅱ

先づマクベス夫人狂乱について興味深い見解を二、三さぐってみたい。

L.W. Hubbell 氏は次の様に解釈している。

Lady Macbeth cracks under the weight of guilt, she goes mad and kills herself, but Macbeth does not. This is not because she is more sensitive than he, but because she is less so. He, being of finer metal, can bend; she can only break. Contrary to popular belief, it is not as a rule the highly sensitized organism that goes mad. The sensitive man fears madness, but it is usually the less sensitive one that succumbs to it. The imagination gives a kind of resilience to the nervous system which frequently enables the artist and the thinker to survive what would destroy a less complicated person. (L.W.Hubbell: *Lectures on Shakespeare* P125-6)

マクベス夫人の方が狂乱に陥るのは、夫人がマクベスよりも、より sensitive だったからではなく、反対に彼女の方がより sensitive でなかったからである。彼は、純良な金属の様に柔軟性に富み曲がる事が出来るが、彼女は、(彼程純良な金属でないで)、折れてしまうのみである。氏によると、鋭敏な人は狂気を恐れるから、より高度な鋭い感覚機能を持つ者程気狂にはならない。普通狂気に陥るのは、感覚の鈍い人である、想像力は神経組織に一種の弾力性を与えると言う。一つの秀れた解釈ではあろうが、彼女の場合、必ずしも当てていない様だ。マクベス夫人の精神の深層部の潜在意識に光をあてる事なく、あまりに表面にあらわれた夫人のみを考えている様に思われる。

Stopford A. Brooke はマクベスとマクベス夫人の殺人後の驚くべき変化について次の様に説明している。

This woman is, like Macbeth, but how differently, all changed. Her conscience and her womanhood slay her. She dies by her own hand.

The reason of this astonishing change in the feeling and action of Macbeth and Lady Macbeth, both moving in an opposite direction to that in which they moved before the murder, may be found in a general difference between man and woman; a sex-difference which, always existing in ordinary life, does not plainly appear until they are placed together in extraordinary circumstances, such as a sudden temptation or a strong impulse of passion. We can discuss this difference in the case of Macbeth and Lady Macbeth, for the one was wholly a man and the other wholly a woman. I have already said that sex in Shakespeare is always normal.

(Stopford A. Brooke: *On Ten Plays of Shakespeare* P. 212)

Brooke によると、マクベス夫人の変化は、男と女の間の一般的な違いに過ぎない。一人は完全に男性であり、一人は完全に女性である故の正常な変化である。普通の生活に於ては、性の違いは、突然の誘惑とか、強い情熱的な衝動とか、異常な出来事に出会う迄は、はっきりとあらわれないが、マクベスとマクベス夫人の場合、この性の違いが問題になるのである。シェイクスピアの性の扱いは極めて normal であると言う。男性に於いては、どんな情熱的な野望でも、その理由、遂行の困難さ、且つ結果について、理知的な思考を伴うが、女性の場合全く異なる。知性が有力である場合、女性の行動には諸々の情念が伴う事なく彼女は知性に従って行動するし、若し情念の方が有力である場合、全く理性からの影響を受けない。それが女性というものである。マクベス夫人は衝動のさなかにある時には、恐怖の感覚も良心の躊躇も、女らしい感情も彼女の意志を阻むのに役立たない。ところで彼女の情熱が消えた時、情念が隠れて了っていた凡ゆる理知が、憂いの数々が彼女に襲いかゝる。そして彼女の持つ女性としての優しさが、自己支配のとどかない睡眠中にあらわれ、その女らしさによって彼女自身復讐される。彼女の女らしさが彼女を殺したのだと Brooke は言う。

非常に面白い、的に迫まった解釈であるが、この論によると、マクベス夫人は只の、いわゆるノーマルな女であった故に自殺した事になり、マクベス夫人の特殊性が消えてなくなりはいまいかという事を恐れる。

柏倉俊三氏は、夫人の変化を彼女の体力消耗に帰している。

「かくして蔽いかくすことも抹殺することも出来ない深刻なる過去とその恐怖による肉体的消耗は、ついに彼女を夢遊病に誘った、蠟燭を片手にかゝげながら、ダンカン王刺殺の日の思出のまゝに、手を染めた血潮を洗うのである。一応良心の苛責の前に腰を屈したとも思えるが、必ずしもそうだとのみは断じ切れない。はじめ王の刺殺に当って「……仕掛けて仕遂がないと身の破滅になる」と、いった彼女である。見方によっては、良心的などははじめから棚にあげておいたともいえる。たゞ重なる異常な出来事に心身は消耗するが、意力だけが依然として衰えず、夢になお殺害の場合にいて、やさしく夫を激励しながら、自らはせせとその血潮を洗い落そうとしていると見る事が出来る。がしかし、体力の消滅は意力の破綻であった。」

(柏倉俊三：シェイクスピアとその周辺 P. 105-106)

体力を問題にしたところ非常に着眼は秀れている様に思われるが、マクベス夫人の狂乱は更に複雑な意味をもっているのではなからうか。(柏倉氏は他の箇所においてはマクベス夫人の性格の複雑さについて述べられている)

さて最後に、シェイクスピア自身は、マクベス夫人の運命をどのような態度で扱ったか考えてみよう。劇の原本をそのまま利用したのか、それとも彼自身がこのケースを性格上の必然的な帰着として描いたのであろうか。

Kenneth Muir によると、(Arden Shakespeare: Introduction P. II. iv)

Shakespeare invents the sleep-walking scene and the presumed suicide of Lady Macbeth. Holinshed says nothing about the fate of Macbeth's wife or of Lonwald's.

従ってマクベス夫人の狂乱、自殺はシェイクスピアの全くの創作である事がわかる。彼はどうしても、精神上の発展として、マクベス夫人を精神錯乱に陥し入れなければならなかったのだ。何故に彼女が狂わねばならなかったのか、以下私見を述べてみたい。

Ⅲ

先にも触れた様に、表面的には、マクベス夫人は意志の強い、野心達成の為には手段を選ばず、しかも事に当っては動ぜず、氷の如き心情の女性に見える。しかしマクベスの妻として考える時、Dr. Johnson の云う如く「マクベス夫人はたゞ厭わしい限り」であろうか。

夫の為には客人達に精一杯の愛想を振りまき、機転でもってマクベスの危機を屢々救っている。マクベスにとっては常に彼のひるむ心を母か姉かの様に励ます愛情ある妻である。只、夫いとしさのあまり、他の事には眼が見えなくなる。ダンカン王虐殺には尻込むマクベスを叱咤するが、それも彼女が王妃になりたい野心から、唆かして殺人をさせたというよりも、愛する者の鋭い吸覚から、マクベスが内心王を殺害しても王冠を待たいという野望に燃えながら、罪の深刻さに躊躇していると察して、その願望を縛る紐を彼の為に断ち切ってやったのではなからうか。

—would not play false,

And yet wouldst wrongly win. (Act I, Sc.v)

(不義を行うのを嫌がっているが、不正な望みを抱いている。)

とマクベス夫人が指摘した様に、マクベスに矛盾を孕んだ性格、いやもっと端的に云えば、卑怯な性格である。

... Sleep no more!

Macbeth does murder sleep, ((Act II, Sc. ii)

(もう眠れない、マクベスは眠りを殺す……)

という有名な語句も、如何にも我々の心を突刺し、同情を誘うが、これとても良心から発した道徳的な苦悩ではなく、発覚の不安からの叫びである。だからこそ破滅を恐れる心が、かえって加速度を伴って一直線に地獄の奈落へと突進む。

マクベス夫人が先に王を殺す事を決心したのではない。王がインワーネスに赴くと宣言した時にマクベスが先づそれを決意したのである事に注意したい。

—yet let that be

Which the eye fears when it is done, to see. (Act I, Sc. iv)

「欲くてたまらぬながら清浄無垢でありたい」マクベスの動揺しやすい性格の弱さを知りつくしている夫人は、赤児に対する母の様に、「黄金の冠の邪魔になるものを舌の力で叱りとばして」やるのである。

.....Come, you spirits

That tend on mortal thoughts, unsex me here,

And fill me from the crown to the toe top-full

Of direct cruelty! make thick my blood;

Stop up the access and passage to remorse,
That no compunctions visitings of nature
Shake my fell purpose, nor keep peace between
The effect and it ! (Act I, Sc.v)

(さあ、お前達、殺逆の企みに伴う悪霊どもよ、来て私を女でなくしておくれ。頭から足の爪先まで、酷い、残忍な心で一杯にしておくれ。この血をにぐらせておくれ。気の毒と思う心への通路をふさいで、自然に備わる憫みの心がおこって、この醜い企みをぐらつかせたり、実行の邪魔をしたりさせないために……)

は野望に満ちた、それが達成の為には、悪魔に身を喜んで売渡す烈しい女性として描かれている様であるが、「私を女でなくしておれ」と云う、寒けのする様な言葉は同時に彼女の自分は女であるという事を知り尽くし、尚夫の為には女でなくなろうという悲痛な決意の言葉ではなからうか。

ダンカン虐殺にしろ、バンコー暗殺にしろ、行為を意図するのは、何時もマクベスである。只、マクベスはそれを実行に移す時に踏切台を必要とする。先づ魔女の予言を必要とする。まだそれだけではたりない。第二の踏切が必要となる。そのマクベスの弱点を知って踏切台の役を買って出たのがマクベス夫人である。夫婦愛と云うよりも、何か母性愛に通じるものがある。強い、が、利己的な愛情である。王位を篡奪した結果、それが夫の破滅を招くものとなるであろう事を洞察し得る聡明さには確かに欠けている。一つの行為を引きおこす事により、連鎖的にどのような結果を次々と招き、遂にはそれが破滅への道に繋がる事を感じ取る事は出来なかったけれども、手についた血は、水で一寸洗いさえすれば、それでよいとは彼女は心底では考えていない。それは夫の崩れ落ちる心を支える為の言葉である。否、彼女自身もそう思込みたかったのであろう。そういう空しい希望で自らを支えたかったのかも知れない。

Nought's had, all's spent,
Where our desire is got without content :
Tis safer to be that which we destroy
Than by destruction dwell in doubtful joy. (Act III, Sc.ii)

(みんな無駄になってしまつて、獲るものは何もない。望みは叶つても、満足は得られないのだから。私共に命を取られる者の方がずっと安全でいゝ。命は奪つても、おどおどした喜びのうちにいる位なら。)

これが、

Infirm of purpose !

Give me the daggers ; the sleeping and the dead
Are but as pictures : 'tis the eye of childhood
That fears a painted devil. If he do bleed,
I'll gild the faces of the grooms withal ;

For it must seem their guilt. (Act II, Sc. ii)

(意気地のない人、その短剣を渡しなさい。眠っている者や、死人は絵と同じものです。絵に描いた鬼を怖がるのは、子供の眼です。もし、まだ血を流していたら、その血を従者の顔に塗ってやりましょう。奴らの罪に見せかけねばいけませんから。)

と、死んだダンカンに脅えるマクベスに投げかけた彼女と同じ彼女であろうか。死んだダンカンを絵と同じものと言切る言葉には良心のかけら一つない。それに対して、殺される者の方が安全でいゝと不安に戦のくのは同一人の言葉としては矛盾している様ではないか。少なくとも表面上は矛盾している。性格の発展乃至変化と見るには、あまりに百八十度の転回である。Bradley は *Shakespearean Tragedies*の中で、想像力の缺如が、マクベス夫人に即時断行の能力を付与するには与って力があるけれども、彼女には致命的である。このために夫には即座に現われるが、彼女にはそんなに早く現われないあの内的の反応が、少しも彼女には予知出来なかったのだと云っている。更に、「殺逆が行われた時、その行為の恐しさは、先づ客達の面上に反射され、それから、突然の真相暴露のショックを伴って、マクベス夫人の眼前に現われて来る。そして直ちに、彼女の天性は力を失い始める。」(岩波文庫、ブラッドレー著、中西信木郎訳シェイクスピアの悲劇 下巻178,9頁)

と真相暴露のショックに彼女の変化の原因を求めている。確かにその原因の一部にはなるであろうが、彼女の意識の底を流れる性格としては、さほど矛盾していないと私は云いたい。というのは、「みんな無駄になってしまう。」云々の言葉は、彼女独りいる時の言葉で、これが、ベエールを被っていない、本当の彼女なのだから。

ダンカン王殺害という重大事によってひきおこされる心理的報復という事を安易に考え過ぎたという誤算もあったであろうし、予想しなかった真実暴露という不安が新たに持上って来た事も事実であろう。が、尚、心身疲れ果て、睡眠不足に悩む彼女の姿こそ、本来の彼女の姿であると思う、さればこそ、この同じ場面に於いてマクベス登場するや、今迄の幻滅と不安に打沈む独言とはうって代って、

How now, my lord! why do you keep alone,
Of sorriest fancies your companions making,
Using those thought which should indeed have died
With them they think on? Things without all remedy
Should be without regard: what's done is done. (Act III, Sc. ii)

(如何がなさいました、貴方、何故いつも一人ぼっちで陰気に考え込んでばかりいらっしゃるのです、貴方の絶えず抱いてのお考えは、その考えている相手の亡びると共に、考え自身も亡ぶべき筈なのに。治療の全く届かないものは、うっちゃってお置きなさるがいいのです。済んだ事は済んだ事ですもの。)

とマクベスを励ましているではないか。第二場の4行から7行迄のマクベス夫人は独りの時と、マクベス登場後の8行から12行迄の間の変化に目をとめてほしい。

豪胆な彼女が、ダンカン殺害が発表された時に、何故彼女は気絶したのであろうか。気になる箇所である。これが客人達に対して、真相を欺くためのチェスチャであれば、誠に計算された演技であって、マクベスよりも悪役にかけては、はるかに上手という事になる。本心から、事の重大さに度々失って気絶したのであれば、彼女の神経は思ったよりも脆く、先程のダンカン王虐殺前後のマクベスとの会話は、彼女の本心を包んでの夫の為の演技と考える事が可能である。はしなくも示したこの気絶こそ、「してしまった事は、取消せない」の最後の言葉と深い関係があるのではなかろうか。気絶は彼女自滅の発端であり、伏線である。

もう一つ問題となる事がある。マクベス夫人は何人子供を持っていたかという事である。HolinshedのChroniclesでは、マクベス夫人は再婚であり、最初の夫との間に息子があった事になっている。

.....I have give suck, and know

How tender 'tis to love the babe that milks me; (Act I, Sc.vii)

(私はね、授乳の覚えがありますから、乳を吸う嬰兒の可愛いさは知っています。)

という言葉が裏付けられるのであるが、マクベスの実子ではない故に、この作品に一度も子供の登場しないわけも頷けるのである。この事から、マクベスが魔女の予言によれば、王位を継ぐのは、バンコーの子孫であり、バンコー自身ではないのに、彼を慌て、死に追いやるのは、自分の死後王位がどうなるかという事が最大の関心事ではなく、「子を生まぬ王笏が死んでゆく彼の手から、いつか落ちるということではなく、今にももぎとられる」とある様に、バンコーによって罪を発かれ、殺されはしまいかと現在の地位を失くする事をより恐れている事が明確である。魔女のバンコーの子孫が王位を継ぐという言葉は彼の心をそんなに支配していない。

行動家としてのマクベスに、彼の性格を大きく変える二つの契機があった。一つはフオレスの荒地で最初バンコーと一諸に出会った魔女の予言であり、一つはダンカン虐殺である。この二つの契機の前後では随分と人格的变化が見られる。凱旋の途中、意気揚々として王位とても手に入らん事もないという考えが、閃光の様にちらと彼の頭の一角をかすめる。潜在的野望が、魔女にによって揺すぶられ、それが可能な形として彼の前に立ち塞がる。次は良心と迷いの闘いが彼の内部でおこる。殺逆を空想するだけで「心臓が肋骨にぶっかる様に鼓動する」気の弱いところがあったのであるが、王虐殺後の彼は、かつてのハムレットの如き優柔さは全然なくなり、悪と偽の権化になる。その豊かな想像力に災されて、幻影に苦しみながらも、次から次へと陰謀をたくらみ、悪逆をつくす。

I dare do all that may become man;

Who dares do more is none. (Act I, Sc. vii)

(人間の男子の為すべきなら、何でもやるが、それ以外をするのは人間ではない)

と最初の知勇備はった武人の良心らしいものは全く影をひそめる。

.....I am in blood

Stepp'd in so far that, should I wade no more,

Returning were as tedious as go o'er: (Act III, Sc. iv)

(血の河の中へ、こう深く踏み込んだ以上、涉り果すより外にしようがない。今更戻ろうたって、道程は同じ様に困難だ。)

と血の海へ入って、もう引返せなくなったと悟った時、これ迄の気の弱さは全く影をひそめ、行動的になる。その我武者羅な行動によって、真相を暴露される不安から逃れ出ようとした。従って、我々は「マクベス」を通読して、ダンカン虐殺前、

My thought, whose murder yet is but fantastical,

Shakes so my single state of man that function

Is smother'd in surmise, and nothing is

But what is not. (Act I, Sc. iii)

(今は只、殺逆を空想しているだけなのだが、そのために我が心の王国は擾乱して、種々の臆測に統一は破れ、思慮は窒息し、只空な幻影ばかりが目に見える)

と人間らしい良心に思い悩む弱いマクベスの姿と、血の海に身体を侵して以後の極悪非道のマクベスの姿と二つのマクベスを持つのである。

まるで、シェイクスピアは主君殺害者の内面を描くのが目的で、「マクベス」を書いたのではないと思われる程、殺人前後の彼の心の動きが詳細に追求されている。望を達した喜びは針の穴程もなく、罪を犯した人間の不安、恐怖、絶望感が強調される。この辺りの心理描写があまりに巧みに出来ている故に我々はマクベスを極悪人として弾ずるよりは、魔女の誘惑の犠牲になった衰れた男として、むしろ同情心さえ誘われる。作者がマクベスの内側から書いているので、つい我々はマクベスを唆かしたマクベス夫人の方を悪く考えがちである。あたかも、マクベス夫人が、ダンカン虐殺を思いつき、実行したかの如く、主役のマクベスへの憎しみが、気の強いマクベス夫人に転化される。

我々は前半で受けたマクベスの印象が強烈であったので、後半のマクベスの邪悪さを見落しがちであるが、マクベスとマクベス夫人の性格を考える時妥当な観方ではない。後半ではマクベスとマクベス夫人は全然立場が逆になる。マクベスは大胆不敵となり、悪の上にも悪を重ねる。しかし残忍、豪胆、鬼の様な女と考えられていたマクベス夫人は心の動揺を抑えられず、日々に憔悴し、些細な衝撃にも堪えられなくなる。手についた血を幻に視、門をたたく音を夢にきく。

マクベスが詩的想像力に富んでいるのに対して、マクベス夫人は非常に感覚的な人であった様に思われる。強烈な意志力も屢々感覚的な感じ方に災いされて、実行との間に距離が出来る。例えば、ダンカンが彼女の父に似ている故に手を下さないという条である。

— Yet who would have

thought the old man to have had so much blood in him. (Act V, Sc. i)

(けれど思いも掛けなかった。あの老人があんなにまで沢山血を持っていようとは。)

との告白は彼女の感じ方が非常に感覚的な事を示す。精神錯乱後に

Here's the smell of the blood still :

all the perfumes of Arabia will not sweeten this

little hand. Oh, oh, oh ! (Act V, Sc. ii)

(こゝにはまだ血の臭いがする。アラビヤ中の香油を用いても、この小さな手の臭いは抜けな
いだろう。)

と嘆き悲しむのは香に対する彼女の感覚性の鋭さを表わしている。

大胆な推論ではあるが、マクベス夫人は、妊娠していたのではないだろうか。気分が正常で
なく、次々とおこる異常な出来事に烈しいショックを受け、流産したのではなかろうか。その
時に見た血が、彼女の鋭敏な感覚をして、ダンカンを殺した時の血を連想せしめ、精神錯乱状
態に導き、遂には自殺に至らしめたのではなかろうか。

IV

マクベス夫人は不思議な女性である。魔女の

Tair is foul, and foul is fair

の歌は、この劇に秘められている矛盾撞着、複雑さの象徴と考えられているが、同時に、マ
クベス夫人の豪胆にして、尚ガラス細工の様に、一寸手を触れれば、脆くも崩れ落ちる内面の
二面性をも暗示している様である。しかし、彼女の謎も一つ一つの解きはぐしてゆけば決して
単純、簡明ではないけれども、矛盾を孕んだままではない。必然的な性格の発展による悲劇で
ある。

マクベス夫人は妻としては、ある意味では良妻である。宴席の終わった後で、「貴方には生に必
要な、眠りという保養が不足していますのよ」と囁く言葉には、女らしい情愛がこもってい
る。アントニオの魂を奪って了ったクレオパトラにも、才知に輝くポーシャにも、このしみじ
みとした優しさはない。心から夫を愛している者の言葉である。

彼等は、共通の野望に燃え、助け合い、励まし合う。注目すべきは、野心達成迄は心を合わ
せ苦勞を共にしても、それがうまく行かない場合、気まづくなったり、相手の計画のまずさを
非難したりするのが世の常なのであるが、彼等の間には、そういった気振りは聊かもない。互
いに、労りの情でもって対している。彼等の夫婦間の深い情愛を物語るものであろう。

マクベス夫人は、マクベスが、いざとなると気力の萎えて了うのを恐れて、叱咤して激励す
る時でさえ、彼女は、しきりと自分に対する彼の愛情に訴える。

was the hope drunk

wherein you dress'd yourself? hath it slept since?

And wakes it now, to look so green and pale

And what it did so freely? From this time

Such I account thy love. (Act I, Sc. vii)

(では、貴方が着ていらしたあの「希望」は酔払ってでもいたのですか？ それから眠り込ん

で今日を覚し、あれ程進んでしようとした事を真蒼になって見ているのですか？ これからは貴方の愛も、こんなものだと思います。）

と、マクベスの実行にうつす勇気のないのを、自分に対する愛もそんなに頼りにならないものかと責める。元来、王虐殺と愛情とは別の次元のものであるのに、マクベス夫人は何もかも、愛情という観点に問題を還元させる。此の短かい言葉に、良い意味にせよ、悪い意味にせよ、マクベス夫人の女性としての一面がにじみ出ている。同時に気付く事であるが、これらは随分きつい言葉であるが、決して夫を軽蔑していない。賢母が意気地のない子を諭す様な、何とかして夫をして望をかなえさせてやりたいという熱意と愛情さえ感じられる。

彼女は夫を励ますが、彼女が夫の励ましを本当に必要とする時でも、夫に頼らない。自分の事は自分で処理する。他の誰にも心の苦しみを訴えない。だから苦悩は彼女の心の奥深く蓄積される。そこに無理が生じて、弱い機械は滑らかに廻転させてくれる油のきれたまゝ、壊れてしまう。夫を愛しながらも夫に迷惑をかけまいとする。彼女の性格の孤独な面を示している。

愛情という点では、ひけをとらぬ彼女も、道徳的な善悪の判断という事にかけては全く駄目になる。彼女に於ける善とは、良人の野望が達成される事であり、悪とは、それを阻む全てという観ええ呈する。善悪とは、それ以上でも、それ以下でもなくなる。だから、ダンカン王殺害という野望が一度到達されると、彼女独自の特殊な世界は崩壊され、彼女に於いて混乱がおこる。確かに一種の性格異常者である。彼女の世界には神がない。悔恨も神とは結びついていない。事実が彼女の鋭い感覚に興える刺激が、意識下の女性を呼び醒し、彼女を戦慄させるのである。

Hazlitt も指摘した様に (William Hazlitt : *The Round Table-Characters of Shakespeares' Plays* [Everyman Library] P188) マクベス夫人は恐しい感じを我々に抱かせるが、リーガンやゴネリルの様に嫌悪すべき存在ではない。

実に嫌うべく、愛すべく、複雑な女性である。シェイクスピアの描いた女性の中でも、最も特色のある個性的な女性であろう。もしマクベスの悲劇の責任の一端を彼女に帰せしめるとするならば、それは、鬼の様な婦人を妻にしたからではなく、自分を支え通す力もない程、かよわいののに、夫いとしさのあまり、我が子は可愛いのに、他人の子は平気で喰った、かの鬼子母神の様に振舞った、あまりにも女性であった女を妻にしたマクベスの悲劇である。